

「禪の國際化と私の役割」

発心寺専門僧堂安居 沖田玉映

『大慈恩寺三藏法師伝』の一節に次の如き

いた。

法師はここで菩提樹と慈民菩提が作ったシヤカ成道の像を、至誠をこえて礼拝し、五体を地に投げて悲哀懊惱し、自ら嘆き悲しんで、

丁度その日は夏座のとされる日で、遠近の衆僧が数千人もここへ集まつてきていたが、法師をみてもらい泣きせぬ者はなかつた。(卷の第三、長澤和俊訳)

「シヤカ成道のころ、私は何処でどのような生を送つていたか自分でもわからない、いま

この法師とは、かの有名な『大唐西城記』の著者、玄奘三藏法師である。

像季に至つてようやく、この地を訪れることが出来た。思うに私は何故かくも罪業が深いのであろうか」と悲涙を目にみなぎらせて泣

玄奘法師は、はるか釈尊在世とは約一千年も隔だていながらも、はるか彼方の聖地を訪れてみたいという気持ちは、生命の危険にあって



も止めることは出来なく、苦難の旅路を辿り、十六年間、求法の旅となるのである。カピラ城やベナレスの鹿野苑、マカダ国^{マカダ}の遺跡には特に感激し、釈尊^{シルマニ}が始めて悟りを開かれた菩提樹下の金剛座は、二百年に訪れた法顯^{ハツケン}は六尺四方で高さは二尺であつたと伝えていながらも、土砂に埋もれて見えなく、あまりの荒廃ぶりに号哭し、涙を流しながら五体投地の礼拝をされ、回りの僧達が貰い泣きしたほどであつたと伝えられている。その頃の中インドは多く寺院や遺跡は荒れはてて、残っている寺の多くは小乗佛教や外道の寺となっている。

そして玄奘法師はさらに大乗教学の中心、ナーランダー寺へと旅を続けるのであつた。

印度佛教は、釈尊入滅百年後には、保守派の「上座部」と進歩派の「大衆部」に根本分裂し、さらに細分化され、約二十部の部派佛教が生じた。南スリランカ、ビルマ、タイ等に伝わった

仏教は上座部系の南伝仏教と言われている。

これに対し部派仏教（旧来のアビダルマ仏教）を批判したことから大乗仏教が生じたのではないかといわれている。これを北方仏教といい、現在、中国、日本に伝わっている。

しかし現在のインドには、釈尊の遺跡は形骸のみをとどめ、多くはイスラム教徒に変容している。また中国も文化革命後、宗教の自由を認めながらも日本の信仰の自由と内容は異なり、伝道布教は許されず、僧侶達は伽藍の管理者の如き存在となっている状態である。

しかし近來、世界の大宗教から見れば、微々たるものかもしれないが、歐米に仏教が拡がりつつある。某誌に次のような一節が書かれている。

はるか昔は印度へ玄奘や義淨の中国僧が遊学し、そして日本から入唐入宋した。しかし現在は逆のコースを辿っている。近い将

来はヨーロッパ、米国へ日本僧が仏教を学び修行に訪れるだろう、と。

日本において一般に“仏教”と聞くと「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」と榮枯盛衰、生死流転の無常を連想させる。

高祖道元禪師については『伝光録』に次の如く、

八歳の時、悲母の喪に逢ふて、哀嘆、尤も深し、即ち高雄寺にて香煙の上るを見て生滅無常を悟り、其より発心す

と記されている。三歳の時、父、久我通親の死に逢い、次いで最愛なる母を八歳の折に失い、幼いながら人生の無常を感じ発心される。さらに『隨聞記』第一には、

貪欲なからんと思はば、先づ須、吾我を離るべきなり、吾我を離るるには、無常を觀する、是第一の用心なり。

と記されている。煩惱を起こす貪瞋痴の三毒

を無くすためには吾我を離れよ、我見を捨て執着から離れるには、まず無常を観じることである。ここでの無常觀は、從来のもののあわれ、悲哀の世間無常、清緒的無常をさらに進め、無常即仮性に目ざめることである。

西洋と東洋の思想形成の異なる中で歐米における仏教思想、特に禪の拡がり、又それがどのように受容されているか興味深く思える。逸早くフランスに禪が受容された背景として、西洋のどちの木と称するフランスのマロニエの並木路は有名となっている。ある季節になると霧に街が見えなくなる程に覆い包まる。霧が晴れると今まで紅葉していたマロニエの葉が一枚も無くなり、風と共に枯葉が舞い上ると話を聞き、フランス人にこの話を尋ねてみると、そのとおりという。

この自然の営みの姿から、日本の落葉のイメージネーションよりも、はるかに強烈に無常を膚

で感じて、禪を受け入れ易かつた理由の一つにならないだろうか。

釈尊から仮々相々の師資相承された法は、国境、文化、思想に無関係に普遍であり、世界中ありとあらゆる処に法は遍在している。時々刻々と時の流れている中、どのうよに禪が西洋で受け入れられているか、是非とも四弘誓願の精神をもつて直接、中に入つて修行したいと切に願つている。

